

## みんなでつくる1枚の写真とメッセージ

写真家 浅田 政 志

日時：平成26年2月15日(土) 会場：福井市美術館

こんにちは、浅田と申します。

自己紹介がてら、いつも撮っている写真をみなさんにご紹介したいと思っております。

僕は「浅田家」という自分の家族の写真をずっと10年以上撮っています。三重県の津市、で生まれ育ちましたので、これからおみせする写真は全部三重県内で撮っています。

僕はいま東京に住んでいて、家族は三重県にいますので、撮影をするときはゴールデンウィークやお盆、家族みんなの休みがあつときが多いです。1年に何回も撮れないので、撮影するときはまとめて撮ります。朝から晩まで丸一日かけて4カット撮るときなどは、丸一日家族と一緒に過ごしています。

写真は僕も写っているので、セルフタイマーで撮っています。セルフタイマーはどのカメラにもついている機能です。12秒でできるセルフタイマーを使って、僕が構図を決めて、親父に「そこたつてー」とか、「オカンここにたつてー」と言いながら、シャッターを押すと、12秒後に切れるので、撮影場所まで走って行って1枚写真を撮り、また戻つて。そういう事を、30~40回繰り返します。最初セルフタイマーを使ったのは、本当にシャッターを押す人がいないので、「しょうがない」「セルフタイマーでいいかな」と思っていました。普通写真と言え、撮る人が、タイミングを掴んで撮ります。シャッターを切る人は写真を撮られる人に対して権限がありますが、セルフタイマーは、シャッターを押すと、切れる瞬間が既に決まっているので、みんながその場でシャッターが切れる時間を共有できます。だから家族で撮っている時は、そのセルフタイマーの切れるタイミングにむかって、全員で演技をしているので、集中力が増し一体感が出てきます。



©浅田政志

2007年に出版させていただいた、「浅田家」という写真集の表紙になっている写真です。この写真を見せると、「どうやって消防署撮影許可を得たのですか」という質問があります。いつも僕は撮影のときには、自分の作品が入っているブックを持って、撮りたい場所に行つて、アポイントなしでいきなりお願いしています。そうすると、九割九分くらいの人たちに、「意味が分からない」と言われます。「こんな撮つてどうなの」「これ、撮つたからうちにどんなメリットがあるの。」などと言われて、説得するのが難しいのですが、僕にはひとつ殺し文句があります。「同じ三重県じゃないですか。」とひたすら言うことを途中から覚えていきました。三重県の出身というだけで、少し一体感があつて「ま、地元のよしみやで、協力したるか」といろんな方に協力していただいています。

この写真は、土曜日の午前中は火事が少ないという理由で土曜の午前中にお邪魔しました。消防士の服を初めて着せていただいて、撮影しました。まわりには20人くらいの消防士の方が座つて見学していました。設備や衣装を借りたからには、退いてくださいとも言えないので、家

族で辱めながら、撮影していました。そうやって撮影していると、消防士の方が、「なんか、もうちょっとこうしたほうがええんちゃう」「いつも、俺やったらこうしとるけど」などと実際働いている人の意見も出てきて、とても参考になりました。



©浅田政志

これが、自分のなかではすごく思い出に残る写真です。さっきも言いましたが、九割九分くらいは最初行くとあまり歓迎されません。ここは有名な鳥羽水族館というところとして、鳥羽水族館に行って、広報の方に「こんな写真撮りたいんですけど」といきなりお願いしたら、珍しく感動してくださいました。最初から興味を持って、承諾していただけたのはここがはじめてでした。「ここでどういう写真が撮りたいの」と言われて、ペンギンと一緒に撮りたいですと言うと、ペンギンはすごく繊細でびっくりしたら、ご飯を食べなくなってしまうという理由で断られました。それに比べセイウチはいつも柵のないところで、パフォーマンスして、お客さんにナデナデしてもらっているのでセイウチは人間と友達になれるということでセイウチと、後日撮影をさせてもらいました。そうしたら鳥羽水族館の飼育員の判断で、1日3回ショーがある中、3回やってしまうと、セイウチが言うこと聞かなくなるだろうと夕方のショーをなくしてもらい撮影しました。撮影は閉館してすぐ始まりました。セイウチのパフォーマンスショーの一番最後にセイウチがキスするシーンがあって、セイウチがキスしているところを撮ろうと思いましたが、うちの父と母がいくらキスの

合図をやっても、セイウチは無視して、まわりにいる飼育員の所に寄っていき撮影すらできない状況でした。大人4人であればなんとかなりますが、動物が入るとこんなに難しいのかと痛感しました。このときも周りに20人くらいのスタッフの方がいらして、見ていた飼育員たちが立ち上がり父と母の横に、いつもの飼育員の方が横に立って、いつものようにキスのマークをすると、キスをするので、2匹の注意がそれたときに、飼育員の方は横に走り、そのタイミングの前に僕がシャッターを切って、そこまで走っていくというのを、何度も繰り返しました。キスして、飼育員が横から退いたときに、うまくパシャッとシャッターが切れたのが3回くらいあって、そのときにみなさんが今良かったよーと拍手してくれました。これだけご協力していただいて、現場でも力も貸していただいて、良い写真撮れていなかったらどうしようかと思っていましたが、後日フィルムを現像して見てみるとなんとか1枚良いのができて、このときはすごく安心しました。

うちの父と母がなぜか目を合わせているという。こんな注文してなかったけど、愛を感じる目線ですごくいいなと思いました。

撮影はデジタルカメラではなく、フィルムカメラで撮っています。だからその現場では良い写真が撮れているかはわかりません。だいたい予測できますが細かいところは出来上がってからしか見ることができないので、後日見るのを楽しみにしています。

うちの母親は看護師です。だから病院の屋上は簡単に借りることができました。友達のおうちの理髪店やケーキ屋を借りて撮ったこともありますし、母校の中学校の理科室を借りたこともあります。

本当に色んな人にご協力いただいていますし、いつも暖かく見守っていただいています。

また並び順も浅田家らしさを生かしてその場で決めます。あまり撮影にお金をかけないというのが、うちの家族のポリシーでして、昔着ていた黒いTシャツを家からかき集めて、うちの兄にペンで描いてもらったこともあります。撮影にいくと、厨房の中や普段入れないところに入れてもらえるので、職場の雰囲気味わうことができ、家族で社会見学のような雰囲気もあって、いつも楽しんでます。

またある時は父親が、かまぼこ板で表札をつくってきたとポケットの中から出してきたこともありました。ひとつでもつくったものが入ると、なんかいいなあと感じます。うちの父親も、明日こういうシーンやから、表札があったら面白いかもと思ひ、わざわざ作ってくれたことが、このときすごく嬉しかったことを覚えています。また、母も小道具を作るときにアイデアをだしてくれています。



©浅田政志

僕の名前は政志っていう字で、「政治家を志す」と書いて、「まさし」です。だからうちの親やおじいちゃんおばあちゃんは、政治家のような立派な人になってほしいという思いがあったと思いますが、まったくそれとは逆方向の道に進んでしまひまして、撮影のときは政治家のように撮りました。このとき家族全員のテンションが上がっていて、すごく盛り上がりました。だからこのときは珍しく家族全員の良い笑顔が撮れました。

セルフタイマーで素人の僕たちが、すごく良い笑顔をしてと言われても難しく、本当に笑っている顔には勝てません。このとき家族みんなで笑いながら、しかもそのときにちょうどタイミングでシャッターが切れてくれたので、珍しい一枚です。何回やってもなかなか出てこないですが、こういった写真が撮れて、思い出に残っている一枚です。

意外と浅田家の写真を見て、うちの父親と母親に目が行きがちですが、一番撮影に貢献しているのは、うちの兄です。ふつう3つくらい離れている兄弟って、「お兄ちゃんこ

れやってよ」と言っても、「イヤヤ」って言って終わりそうなものですが、うちの兄は、「まあしょうがないな、弟のためやったら、頑張るか」と移動の運転や、撮影のシチュエーションや構図で僕が悩んでいると、いつも協力してくれています。兄の演技は細部にまで込められています。写真というのはこの手一つで違ってきます。力が入っている感じが、我慢している雰囲気を出します。

この前、展覧会をしたときに、作品を見て、おかしいところがあると言われました。酒好きの人からしてみると、ちょっとここは呑ん兵衛ほくない、酒好きじゃないところがあると。呑み終わったらフタもしないで転がしておくというので瓶を立てた状態はおかしいということと、呑む人は、一緒の銘柄しか飲まないと言われました。来場者からの意見はリアリティがあって、勉強になります。こういった些細なところまでみつけてもらうのも案外楽しいです。

またある時忍者の写真を見た忍者好きの方に「忍者が後ろから撮られたらアカン、後ろから撮られた時点で忍者失格や」と突っ込みが入ることもあります。



©浅田政志

これは、セルフタイマーを切って、家族がいるところにいつも走っていくので、卒業式のシーンですが、いつもの撮影の雰囲気というか、自分がセルフタイマー切って、「いくよ」と言って、みんながこうやって暖かくこうやって待っていて、一緒に写真撮る雰囲気がいつもの感じだなど、僕はこの写真を見ながら、思っております。

デモ行進の撮影前日、明日デモ行進の写真撮るから、看板を、ひとりずつ寝る前書いてほしいとお願いしたら、うちの母親は『大好き 世界の宝 憲法9条』お兄ちゃんは、『ピース』僕も『ピース』と描きました。うちの親父だけ『日曜日撮影反対』と描いていました。そういうデモじゃないでしょって。「なんでこんなことかいたのお父さん。」「本当は日曜日ゆっくりさせてほしいんや」直で言えばいいのと思いつつ、せっかく描いたのだからと思って撮影しました。ゆっくりしたいそうです。撮影、1日かかりますから、相当大変みたいです。



©浅田政志

これが、僕が一番最初に撮った写真です。19歳学生的时候了。先生から、「たった一枚の写真で、自分を表現しなさい」という課題が出ました。たった一枚の写真で自分を表現するというのは難しいと思って、どう撮ったらいいのかと悩みました。そのとき「たった一枚の」という響きにすごく新鮮な感じを覚えました。写真ってたくさん撮れるし、持てるし、一枚だけという制限を考えずにバシャバシャ撮っている中、本当にふと一生に一枚だけしか写真撮れないという状況になった場合に、自分はこういった写真撮りたいのかな、とか、「あなたは、死ぬ前に一枚だけプリントをみれますよ」と神様に言われたら、こういった写真を自分はみたいのかなという疑問が、このとき湧いてきました。そのときに、じゃあ一生に一枚しか写真撮れないのだったら、家族の写真を撮りたいと思い、家族の撮影が始まりました。このときは、今まで見てもらった「浅田

家」とはちょっと違って、自分の家族の思い出話を再現している写真を撮ろうと思いました。家族のたった一枚の写真で、自分の家族を撮りたいと思いました。そして、ふつうに並んで撮っても、つまらないというか、もっとなにか浅田家らしい、自分の家族らしい写真を撮りたいと思いました。思い出の中で、一番思い出深いことや良いシチュエーションを想いかえました。

それは僕が小学校低学年のときの思い出の話です。僕は夜ご飯を食べて、2階で休んでいたら、1階で父親の呼ぶ声がしました。すごく大きな声で呼んでいて、なにかなあと思って下に降りたら、血まみれの父親が倒れていました。父親は、ロールカーテンを閉めたときに足を切ってしまったみたいです。うちの母親は看護師なので、小さいときから怪我をしたら、母親に報告するのですが、このときはたまたまなくて、「お母さんどこおんの?」と尋ねたら、「小学校に盆踊りの練習をしに行っている」「盆踊りの練習しにいったん、じゃあ呼びにいつてくるわ」と言って家を出ました。自転車で走って、お母さんに「親父が死にそうやではやく帰ってきてー」お母さんも焦りながら、ふたりで自転車こいで帰っている途中、僕が焦りすぎて、はやく父親に知らせたくて、120%くらいの力で自転車をこいでいたら、そのまま顎から落ちてしまって、僕も血まみれになってしまいました。もうオカンが「あんたなにしよんの、すごい怪我しとるやんか、お父さんもすごいことになっとるし。」お兄ちゃんはこのとき全然気付かず2階でテレビ見ていましたが、「ちょっと降りてきてー!」と呼ぶと、お兄ちゃんも焦ったみたいで、「なにになに」と言って、階段からこけて、頭打つという、あほみたいな1日で、3人怪我したまま、うちの母親の病院に担ぎ込まれて、同僚の看護師さんから、「浅田さん、なんか事件があったんですか。」と尋ねられ「事件・・・はないです。ただみんながドジなだけで怪我しました。」ってお母さんは辱められていました。

その当時を表した作品です。

こういった家族写真を撮りながら、他にもいろいろと写真を撮っています。今回は家族写真ではなくファッション写真です。今月の末から、水戸芸術館で「拡張するファッション」というグループ展を開催します。その後、香川県

の丸亀市にある、猪熊弦一郎現代美術館を巡回します。

僕が写真を撮って、洋服はケイスケカンダ、今をときめく、神田恵介。僕もケイスケカンダの服を360日くらい着ています。手縫いのチクチクだったり、よくあるような3本ラインのジャージだったり、セーラー服、学生服をテーマにして服をつくっている方です。モデルは本当の高校生です。公募して、撮ってほしいという子を、2人で撮りに行った作品です。「卒業写真の宿題」というタイトルになっています。高校生活の中で、いろんな写真を撮られたり、最後アルバムに残ったりすると思いますが、そういったアルバムに載らないような、自分たちで本当に撮りたい写真というのを、撮ってみようということになりました。そこでケイスケさんが、その子たちにオリジナルの制服をつくって、1枚写真を仕上げるというファッション写真です。ふつうのファッション写真とは、違う撮り方をしています。こうやって長い時間をかけて、しっかりと撮りたいと思っていたので、すごく息が合ってつくってきた作品になっています。

それぞれ、事前に会ってどういう写真を撮りたいのか、どういう高校生活だったのか、どういう今の自分を残したいかという事を高校生からヒアリングして、それをなるべく形にして撮りました。

高校生活に、自分なりに悩みもあって、人のものさしで自分を測ってしまうというか、自身の価値観で、人を判断できない自分を表現したいということで、人の価値観みたいなことを表現するために、混沌とした写真が良いと言っていたので、すごく人がたくさんいるところがいいだろうと駅前撮影したものもあります。

この友達と撮りたいとか、わたしひとりで撮りたいとか人によってさまざまです。

制服は誰もが着るもので、ファッションかと言われれば、ある意味遠いと思います。配布されて、その中で着こなすとか、それぞれ楽しんでいる方もいると思いますが、制服自体にすごくオリジナリティがあります。

「卒業写真の宿題」といって、現役の高校生をモデルにして撮った作品と、もうひとつ別に、「卒業写真の自由研究」というものがあります。実際「卒業写真の宿題」は、高校生限定だったので、高校卒業した人は撮れませ

んでした。高校卒業した人も、すごく撮りたい、撮ってほしいという声があったので、高校卒業したメンバーを集めて、ひとつのクラスをつかって、ファッション撮影をしています。「卒業写真の宿題」とは撮り方が全然違いますが、ケイスケさんと一緒につくった作品です。

>林間学校>学校生活>修学旅行

全国で公募したので、みんなバラバラの学校からの参加です。四国からひとりで来ていたり、九州から来たり。普通ファッション撮影はスタジオでモデル使って撮ることが多いのですが、そういったいわゆるモデルじゃない人たちとファッション撮影をしてみたいというのがあって、声をかけたら来てくれました。本当に林間学校や修学旅行を卒業したみんなに味わってもらいたくて、その中にファッションや服があるということをしたかったので、林間学校は林間学校らしくキャンプファイヤー囲んで、みんなでマイムマイム踊ったり、学校での撮影のときもみんなで歌を一緒に歌ったりしていました。



お弁当はみんなに作ってくれるようお願いします。「ケイスケカンダ」はぞうさんマークのブランドなので、ぞうさんの焼き印が入っているものや、ぞうの形のパンを頑張って作ってくれました。みんなのこだわりが詰まったお弁当でした。撮影時につかったジャージなどはコレクション並に全部つくっていらっやいました。これらは全部でっかあげの行事なんですけど、浅田家と同じ撮り方です。ただその撮り方を、ファッションのデザイナーと一緒にこんなに時間をかけて、一緒に作品をつくろうと言ってくれた仲で、すごく思い出があります。この子たちもたぶん緊張して、自分で応募してくれてきたと思いますが、それぞれの中で、撮影の思い出がひとつでも残れば嬉しいなという思いで撮影しました。アルバムの後ろによく載っているようなシーンばかりを撮りたくて、よくあるようなコースで、よく

あるような写真を撮っていました。

(撮影ワークショップ)



今日は、みなさんと1枚思い出に残るような写真を撮りたいと思っています。

今日はピンクとか赤色の暖色の服着ていただいていると思います。あとメガネ持っている方は、メガネを着用してください。それで、皆さんが並んで撮ってもつまらないじゃないですか。だからみんなでどういった写真を撮ったら面白いのかということ、今から決めたいと思っています。

せっかくなので赤い感じとか、福井らしい感じとか、仁愛らしい感じとか、みなさんでやるからこそ意味があるようなポーズを考えてください。

<今回の私たちの卒業制作のテーマが、リレーなので、つなげるって意味で、みんなでバトンを渡していくという><みんな赤い服なので、寝転がって、ハートをつくる><メガネの上からメガネ><さっきのリレー案のバトンメガネにして、メガネリレー><家族写真><空気イス><一列に並んで、全員足をクロスして、手をこういう感じ><仁愛の天上天下のポーズ><動物園><初恋の顔><建物を生かして、螺旋状にいっぱい並べるので、真っ白で赤で面白いかな><みんなで手つないでわ〜〜みたいな><みんなで肩を組んで、メガネを持ちながらキス顔><福井なので、蟹をつくる><かめはめはがしたいみたい><とぶやつ><福井もしくは仁愛><千手観音><この隣の公園に遊具があって、航空写真で見ると、フェニックスの形になってる>

ここはハートをつくってみましょう。

バレンタインですし、昨日終わっちゃいましたね。終わったけど、一日遅いバレンタインということで、みんなでハート作りましょう。

ちなみに顔も大事ですよ、ハートを作ったとしてどん

な顔で撮りましょうか。

<キス顔><ウインク><惚れ顔><変顔><甘い顔>  
多数決の結果撮るときにウインクをして撮影します。

(みんなでハートをつくる)



(作品講評)

この記念写真は、また後日みなさんの手元にデータとしてお渡しするので、こういう日もあったかなと、残しておいてください。

何十年後に見たら、学生のとときの写真だなと思ってもここに写っていると思うので、楽しみに待っていてください。

今日は本当にみなさんありがとうございました。

みなさんもまた自分の追い求める作品や自分のやりたいことをしながら、良い作品が生まれることを、陰ながら祈っておりますし、みなさんになら出来ると思うので、頑張してほしいと思っています。

あとは、家族写真もみなさん、年に1回とか2回くらい全員で撮って、それを思い出にとっておいてもらえれば、ゆくゆくは良い写真に必ずなると思うので、撮っていただきたいなと思っています。



(Photo:浅田政志)